

櫻

市内女子高校生、はねられる

平成十一年九月十二日 某地方新聞

交通事故少女、原因不明の昏睡状態が10日間

原因は病院。問われる医療体制、杜撰な管理

平成十一年九月二十六日 某新聞

血清在庫切れ？厚生省、あきれる

疑惑 有名代議士秘密裏に入院 入院中事故少女と同じ血液型

平成十一年九月二十七日

某週刊誌代議士秘書VS小高院長「カネはもらってない」

隠蔽 献金 小高院長ココだけの話

平成十一年九月二十八日 某週刊芸能誌

夜

樹齢百年を数えよつかという壮麗な八重桜が、闇の中に己を誇示するかのよう^{ごとく}輝いている。

その袂^{たもと}、子供であればすっかり収まってしまえる太い根の間に、年の頃十五、六であるつか、少女が背を預けている。

遠くでサイレンの音が響いている。

しかし、少女には聞こえない。

力なく根に添えられた腕の白さと、うなだれて顔を隠す髪の色が、等身大の日本人形を思わせる。

サイレンの音が近づいてくる。

本来、真っ白であったらろうセーラー服を朱に染めあげ、首筋から溢れる鮮血はそのまま彼女の身体をつたい、地に染み出している。

「くすくす」

なま暖かい風といっしょに笑い声が流れていった。

しかし、少女には聞こえない。

教室

「ねっつ、テレビ」来てるって」

「マジっ？」

「マジマジ、クラブの子がインタビュー受けてるって」

2、3人の生徒が嬌声きやうこゑとともに教室から駆け出してゆく。得体の知れない何かに対する高ぶりが、放課後独特のざわめきに拍車をかける中、一人、週刊誌を読みふける少女がいる。

別段珍しい光景ではないが、周囲の浮き足だった雰囲気ふきあそびが逆に彼女を浮かせていた。

彼女が手にしている雑誌は先週発行されたものだが、ここ数日の間に生徒、教師を問わず学園に関係する者で知らない者などいなくなってしまう。たいわく付きの代物である。

当然、雑誌などは没収の対象となるのだが、本来あるはずのない春期休暇中の登校日に学校側は慌ただしいだけで、咎める教師は誰もいなかった。

彼女は同じページを何度も読み返していた。その記事には「通り魔」「連続殺人」「猟奇」などの血なまぐさい単語が端々に見られる。

四度読み返して、彼女は記事の中ほどに視線を戻した。

「三月十五日、市立妙寺高等学校二年・野田敬子^{のだけいこ}。三月二十三日、私立園井大学付属高校三年・丸山友恵^{まるやまともえ}」

人差し指の背でくちびるをなでながら小さく記事を読み上げる。
そして最後に、

「四月三日、聖ラカエル女子学園二年・和歌瀬園子^{わかせそのこ}」

本日、全校生徒が呼び出される原因となった人物の名を呟いた。
視線を雑誌に向けたまま、少女は今日の葬儀を思い出す。

とても静かだった。

葬儀なのだから、至極あたりまえすぎる感想だが、彼女は心底そう思った。
た。

体育館の舞台に設けられた祭壇には写真がかざられていた。陶器のようなきめ細かな白い肌と黒い艶やかな髪が印象的な美しい少女である。静かな美しさが日本人形をイメージさせた。

とても静かだと感じたのは、和歌瀬園子のイメージと重なるためだと今になって気づく。

「紗々川さん^{ささがわ}」

雑誌を閉じて振り返る。クラスメートの子だ。

「これから、みんなで食事に行こうと思っただけ」

「ごめんなさい、私、図書館で調べ物があるから」

紗々川と呼ばれた少女はそう言うてから、はっと息をのむ。

「あ、そう」

誘いに来たクラスメートは無感情に言つと、さっさと席を離れていってしまつた。

その先には雑談に興じる三人組が見える。

少し遅れて紗々川も席を立つた。なんとなく逃げているような気がして嫌だったが、見えるところで陰口をささやかれるのはもっと嫌だった。

廊下に出て、紗々川はため息をついた。

「また、やってしまった」

と後悔する。

人と話をするときは、要点をまとめて簡潔に伝えるようにしよう。つまらない話題で間をもたせるのは相手にとって失礼だ。

そう決めたのはいつのころからだろう。

それが他人には冷たい態度に見えるらしい。だからクラスでも浮いている。

紗々川は廊下を進む。途中、何人かの生徒が彼女に会釈して通り過ぎる。一年生たちだ。紗々川が二年生なのは、制服の襟のデザインでわかる。

そもそも、こんな学校に在籍していること自体、自分を浮かせているのだ。紗々川は改めて思い返す。

有名証券会社の要職に着いていた父は今でも現役の時と、その態度は変わっていない。だから新しい職場を転々としている。

それでも娘は上流階級の子女が通う学校に入れたいらしい。

紗々川が両親に憤りを覚えたのは高校に入る少し前だ。

当時彼女の通う中学校もこの学園よりしく世間では「金持ちの子が通う学校」で有名な所だった。

階段を降りたところで、紗々川はクラスの担任とすれちがう。

「さようなら、シスター」

「はい、気をつけて」

中学校は禅宗だった。当然、高校も同じ系列に通うことになるだろうと、幼いなりにも予感していた。しかし、ここはキリスト教・カソリック系私立高校だ。

紗々川はひどく落ち込んだ。両親の節操のなさを。

同時に怒りも感じた。大人の見栄というものに。

だからといって、反抗しようだとか、家出しようという考えは全くなかった。

理由はどうあれ、まともな学校に通わせてもらっているのは事実であるし、その恩はしっかりと受けとめて、将来は親に返してあげるのが、子供の義務だと紗々川は思っている。

そのためか、紗々川の学内での成績はかなり良い。

彼女の素性を知る者は疎ましく思ったものだが、紗々川にとって逆にやる気を起こさせる一要素になるだけだった。両親に対する建前と本音のジレンマがはけ口を求めた結果なのだろう。

そんな両親とも正月以来会っていない。「良いレポートが書きたい」といって、春休みは寮から出なかったためだ。彼女なりの反抗だったのかもしれない。

ちょうど図書館へ続く渡り廊下に出たところで立ち止まり、苦笑した。なにを勝手に怒っているのだろう。

興奮気味な気分を紛らわそうと手すりに近づく。グラウンドが一望できた。

ウォームアップに入る陸上部 紅白戦をはじめているラグロス部 春休

みであること、クラブ活動は別問題なようだ。

その奥、グラウンド突き当たりに見える校門にはマスコミの人間と生徒が数名、さらにそれを囲む生徒たちの黒だかりが見えた。

先月から起こっている連続女子高生殺人事件、第二の被害者である和歌瀬園子がらみであることは間違いない。

紗々川は嫌悪感をおぼえた。冷めた目で見つめる。

無神経な報道や、それに喜んで答えている生徒たちに嫌悪しているわけではない。

だから、死者への同情や侮辱といったものが彼女の持つ嫌悪の根幹を成しているわけでもないのだ。

ではいったい何なのか。

彼女自身、何度も繰り返した疑問。結局漠然としすぎていて答えは出ない。

他人の事情に顔を出せる余裕が自分たちにはある、とひけらかしているような、まるで、すべての生き物の中で自分たちが最も優れている、そんな傲慢さが嫌なのかもしれない。

傲慢？

彼女は苦笑する。それを言っなら、自分もその一人はずだ。

「話には聞いたことあるけど、普通こんな所ですかなあ」

声に出さずにつぶやいた紗々川が背を預けている書棚の奥。

陽光に照らされて、たたずむ二人の少女が見える。

ショートヘアの少女を、もう一人の赤みがかった髪を肩までのばしている少女が抱き寄せていた。

二人の影を見て、すぐさま書棚に隠れた紗々川にはその程度しか分からなかった。

しかし、二人が唇を重ねているのは確認していた。

しばし、悩む。

たしか、二人のいる席が春休みに入ってから、ずっと使っていた閲覧席のはずだ。

閲覧席には学内ネットに常時接続されているPCが設置されている。本来、共用端末なのだが、紗々川は自分の使い勝手良くカスタマイズしていた。

少々手を加えるだけで効率は格段に上がる。今回の作業は検索・情報収集が主体なのでアテにして来てみたものの、先客に阻まれている、というのが現状だ。

紗々川は手元の新聞紙に目をやる。

これだけで情報が集まりきるとは到底かんがえられない。

「でも、せつかくの逢瀬を邪魔しちゃわるいよね」

二人に言い訳するようにつぶやいて、書棚から離れようとした。

「じゃ、今夜…」

「はい…教会跡で」

二人の言葉が耳に入る。紗々川は頬を真っ赤にして、そそくさとその場を離れた。

「あら紗々川さん、ひさしぶり」

「わあ」

書棚数棟をかきわけたところで、顔なじみの司書の女性に出会った。

「どしたの?」

「い、いえ、なんでも」

少し訝^{いぶか}しんで、司書は百科事典数冊をかかえながら紗々川を見上げる。

「背のびた?」

「は?」

紗々川がきょとんとするのを確認すると、司書はくったくない笑みを浮

かべた。

司書のからかい癖を思い出した紗々川は苦笑しながら、おざなりな会釈をかえす。

「そんな、シダ植物ですか。私は」

言いながら、百科事典の半分を受け取ろうとするが、表情をくずしたまま司書は手で制した。

「あは、これくらい大丈夫。でもホント、元々背が高いからかな。伸びたように見えたよ」

人気のない館内に笑い声を響かせ、「ゆっくりしてっつてねー」と捨てぜりふを残すとさっさと階段を昇って行ってしまった。

まるで自分の家のような扱いである。

紗々川は陽気な司書を見送って、一息つく。

「失礼」

背後から声がした。どっちら通路をふさいでしまっていたらしい。今度は落ち着いて対処する。

「いじめんなれ…」

振り返って、思わず言葉を詰まらせる。

シヨートカッタの子だ。

当の本人は、紗々川のリアクションなど気にも止めずまっすぐ出口へ向かう。その足取りはしっかりしているが、何かにひっばらわれているような魂が身体の一歩前を歩いているような心許なところを感じさせる姿だった。

一瞬、不信に思ったが、前の出来事を合わせると、納得できないでもない。紗々川は気にしないことにして、再び閲覧席に向かった。

件の席には先ほどの少女がまだ座っていた。

気にせず隣の席へ向かう。

「となり、いいかな?」

声をかけられた少女は、ゆっくりとした動作で振り返り、どつぞつと言つと紗々川に微笑んだ。

制服は二年生のものだ。色白な整った顔立ちに、肩までのびた赤みがかつた髪が似合っている。日頃丁寧にブラッシングされているだろう緩やかなウェーブが、春の日差しに輝いている。

一瞬見とれてから、同じように伸ばしてはいるが、手入れもロクにしていないボサボサな自分の髪を思い出して苦笑する。

「あなたが紗々川栄子さんね」

「え、ええ」

うわずった声で返事してしまった。つい先ほどの光景を意識してしまつた。

「…かしいわ」

「え?」

紗々川は聞き直した。彼女の言葉が聞き取れなかったからだ。でも、当の少女はきよとんとしている。

空耳か。

突っ立っているのも妙なので、横向きに腰掛けた紗々川は質問を変えた。

「ごめんなさい。どこかで会ったかな?」

やはり、ゆっくりした動作で少女は身体の向きを変えて、紗々川と膝を合わす。

「いいえ、今、司書の人の声を聞いたから…」

「?」

「お噂はかねがね。…そう、三月の終業式の事とか」

そう言っつてクスリと笑っつ。

紗々川は苦笑で返した。あまり思い出したくない出来事だからだ。

「あの三人をやり込めてしまっなんて、すごいね」

感心した口調で少女が言っつ。

少なからず、紗々川はイジメにあっていた。終始無視していた彼女であ

ったが、たまにはキレておかないと相手はつけあがるだけだ。
紗々川は苦笑したまま返す。

「少し腹立たしかっただけ。だって、あの子たち、まるで…」

自分たちより優れた者なんて去ない、とでも言いたげな。

黙り込んでうつむく紗々川の顔を少女がのぞき込む。

「ん?」

あわてた紗々川は曖昧な笑みを返した。

「ボロを出したのは向こうよ。そこをチクチク言っただけ。…結局泣かしちゃったけど」

「へえ、そうなんだ」

紗々川は怪訝な表情になる。けげんあの現場にいたのであれば、事てんまつの顛末は知っているはずだ。

「ごめんなさい。私半年ほど休学していて、このあいだ復学したばかりなの。あなたの噂は本当に聞いただけ」

「ああ、なるほどね。まあ、あやまることでもないけどね」

紗々川は少女の手元に山積みされた辞書やテキストに視線を向ける。

「それで、遅れを取り戻すために勉強中、と」

「そんなところ。あなたは…」

紗々川の机に目をやる。

「新聞？」

「ええ、ちょっと…ね」

言いながら、フレームで背中をはさまれた新聞数部を机に置いて、備え付けのノートパソコンの電源を入れる。

自分の事を話したり、相手の事を訊ねてみたり、紗々川は思いのほか自分が饒舌じょうたろになっているのに驚いた。

先ほどの司書と初めて出会った時も同じように感じたのを思い出す。

何一つ準備もなく、話ができる人たち。

自分にとって図書館とは、そういう場所なのだ。

紗々川は漠然と納得した。

画面にユーザー名とパスワードを入力するウィンドウが表示されるのを見て、紗々川は大事なことを思い出した。

「あ、名前、聞いていいかな？」

「ごめんなさい。私の名前は吾妻のぞみ」

「あがつまさん、ね。私は…」

少し言い淀む。

「私ってそんなに有名？」

一転して吾妻の表情が真剣になった。

「ええ、かなり」

二人の笑い声が館内に響いた。

夕暮れ

首筋まで走った悪寒が拡散して全身に鳥肌が立つ。

恐れ。

紗々川はここが遺体発見現場であるからだ、と思っていた。

「本当に大丈夫？」

吾妻が心配そうに声を掛けてくる。

新聞記事は、人通りのない公園や団地の裏などに遺体が放置されている事を共通点として取り上げていたが、それだけではなかったのだ。

桜の木。

第二、第三の現場は未だ警察が調査中だったので、本当の発見現場というものを見ることはかなわなかったが、警察や報道関係者、野次馬たちに取り囲まれるように桜の木は確かにあった。

その度に紗々川は立ちすくんでしまったのだ。

艶やかな花とは対照的に節くれ立った枝が不気味に湾曲してのたくっ

ている。特に樹齡を重ねたものはそつだ。

秋冬などは奇怪な姿がさらけだされ、夕暮れ時に落とされる影は不気味以外のなにものでもない。

あのようなモノを愛でる気には到底なれない。

紗々川が桜の木に対する明確な感想を持ったのは最近の事で、以前は得体の知れない恐怖にただ脅えているだけだった。

小学生の時の体験が原因なのだが、当時の記憶を紗々川は鮮明に覚えていない。こういったものもトラウマといつのだらうか。

「もう、やめようか?」

吾妻が再び話しかけてくる。

「ううん、大丈夫。これで最後なもの」

気丈に微笑んでみせ、一歩踏み出す。

「それに、まだ何も解っていないし」

紗々川がこの事件に興味を持ったのは例の週刊誌が学内や寮に出回ってしばらくしてからだ。クラスメートとの交流が疎遠な彼女は、自然と学内の流行にも疎くなる。

女子高校生がひと月の内に3人も殺された。遺体発見現場はよく似た場所、殺害手口に関しては酷似している。

いわゆる連続殺人事件。珍しくもないゴシップだ。

元々、そういった類のものには興味がない方であるし、今回に限っては、被害者となった同窓生をあれこれ詮索する輩に不快を感じてもいた。にもかかわらず、紗々川が妙なトラウマに恐怖しつつも現場に足を運ぶ理由は全く別のところにあった。

欠落感。

雑誌にも新聞にも、事件の概要から詳細まで書き出されているのだが、決定的に欠けている要素がある。

紗々川はそう感じたのだ。

根拠など無く、あくまで紗々川個人の推測でしかないのだが、本人には確信があった。

逆に言えば、事件そのものに関わろうとしていないわけでも、犯人をつきとめようと思っているわけでもないのだ。とにかく何が欠落しているのか、紗々川は気になって仕方がなかった。

「じゃあ、現場を見に行こうよ」

言い出したのは吾妻だった。なりゆきよ、紗々川が新聞記事を調べる事になったあらしを説明した後の事である。

普通的女子高生が血なまぐさい遺体発見現場などに行こうと思っただろうか。どう見ても、吾妻は他のクラスメートと同じく「お嬢様」である。紗々川は正直驚いた。

「百聞は一見にしかず、って言うでしょ？」

くったくない笑顔で言う吾妻。

ただの世間知らずな考えだったのかもしれない。でも、紗々川は彼女に好感をおぼえた。

吾妻は心配そうに紗々川のななめ後ろに付き従っている。

この公園に至るまでに吾妻は何度か手を貸そうとしたが、紗々川は丁寧に断っていた。

人柄に好感は持てるが、趣味はまた別の話なのである。

紗々川は首筋に未だ残る悪寒を手でさすっつていさめ、雑誌や新聞から得た情報を思い出して意識を集中する。

警察は犯人が同一人物であるとの正式見解を出していない。あくまでマスコミが連続殺人であると吹聴フキウしているだけなのが現状である。

連続殺人であるとする理由は三点あり、全て現場の状況に集約されていた。

紗々川は改めて周囲を見回す。桜の木は見ないようにしながら。

夕暮れがせまっているせいか、目に映るものすべてが朱に染まっていた。

ブランコ、滑り台、砂場、平日のこの時間帯であるにもかかわらず、公園には女子高生二人しかいない。

二人目は郊外の市民公園、三人目は高台にあるマンションの裏手、他の現場も似た雰囲気だった。街中の死角。

マスコミは共通点の一つとしているが、いまひとつ説得力に欠ける。殺人など、そういう所で行われるものだろう。

では、桜の木も同じ扱いはないか。紗々川にとって特別な存在であつても、公園には必ず植えられているし、市の緑化運動も盛んだ。

もう一つは、被害者が十五、十七才の女性であること。

所持品は盗まれておらず、暴行を受けた痕跡もない。

一部の雑誌は、抵抗した形跡もないと報じているが、情報源が警察関係者

とされているだけで、事実かどうかは疑わしい。

どちらにせよ、殺害が目的であることに変わりはない。

最後の共通点は殺害手口である。

警察が同一人物による犯行である事を前提に非公式捜査している
と、マスコミが報じている根拠でもある。

紗々川は遺体が発見された本当の場所を探す。公園はそれなりの広さ
があるものだが、それでもすぐに見つかった。

身体が震える。

紗々川は桜の木に向かった。

被害者は三人とも、鋭利な刃物か何かで喉を切り裂かれていた。死因
は失血死だ。

夕焼けが周囲を真っ赤に染めても、それは容易にわかった。

同時に紗々川は、欠落感の原因が解った。

血だ。

被害者が放置されていたと思われる場所は、桜の木の袂だった。三メートル四方の地面が限りなく黒に近い赤で染まっている。幹にも、痕跡はあった。

樹皮に染み込んだ血液が変色してできた黒い跡が、紗々川の腰あたりの高さから下へ広がっている。

座り込んだ人影に見える。

紗々川は目眩をおぼえた。口の中に鉄の味がひろがる。

ふるえが止まらない。たまらず後ずさりする。

「何かわかった？」

慌てて振り返った。

遠くに吾妻の姿がある。

背にした夕日が彼女の表情に影を落とし、影は紗々川の足下まで伸びていた。

まるで吾妻でないような、否、人でもないような気がする。

紗々川は、幻想にとりこまれた気がした。真っ赤で冷たい幻想。

吾妻のよつに見える少女は瞳だけで語る。

「ひひひ」

「これは夢じゃない。

紗々川は心の中で何度もつぶやいた。

しかし、喉は乾くばかりで、逆に口の中にひろがる鉄の味は、はつきり
とじつくぬ。

「ち、が…」

思考もままならぬ中、言葉を絞り出す。

「血？」

吾妻であったらう少女が繰り返す。

「そう、血ね。ひと月経ったのにまだ残ってるね。すごい量だったん

でしょひね」

「くすくす」

「紗々川さん、私ね、生き物の根元は血液だと思っの」

少女の影が揺れる。髪が燃えるように紅い。

「身体なんて肉と骨だけでしょう？それだけで生きることなど、

かなわない」

揺れた影が少しずつ近づいてくる。

紗々川は五感がゆっくりと遠ざかり、入れ替わりに埋もれていた記憶がおぼろげになってくるのを、意識の縁で呆然と感じていた。

「半年前、事故で入院したとき、私、死ぬところだったらしいの。…血が足りないって、病院の手違いもあったらしいけどね」

かすんでいた記憶が徐々に鮮明になってゆく。

下校途中のグラウンドは、今の公園と同じく真っ赤な世界だった。

小学生の時だ。

何年生だったかは思い出せない。

「そのとき、確信したわ。血と命は同義だって。そう思わない？」

桜が美しいのは根元に少女の死体が埋められているから。

紗々川は藤棚の奥にある桜の木を見上げていた。

どれほどの年を重ねたかはわからない。夕日に照らされても血身の色を

失うことなく輝いていたのを覚えている。小学生の紗々川は、純粹に綺麗だと感じていた。

「でも、血は肉体と切り離すことはできない。現にほら、血は外に出ると醜く固まってしまっでしょっ」

影の少女は少し手をのばせば紗々川に届くところにまで来ていた。

紗々川の背後に広がる血溜まり跡に視線を送る。

「あれは死んでいるのよ」

気が付けばグラウンドを飛び出していた。

走る。

泣きじゃくりながら、母を呼ぶ。

いつもの通学路を走っていたようだが、涙でぼやけてはつきりしない。

直前の記憶はもっとはつきりしなかった。

無我夢中で走る。

いや、逃げていたのだ。

桜の木の袂に、なにかがいた。はつきりとわからない。

解っているのは、それがとても恐ろしかったという事だけだ。

以来、紗々川は桜の木が嫌いになった。

視界はぼやけていたが、目の前にいるのは吾妻であることはわかった。知らない間に膝を折っていた紗々川は彼女に支えられていた。

本物の吾妻だ。彼女のゆっくりした吐息が聞こえる。

「あなたの話は良く聞くわ」

さらに顔を近づける吾妻にどきりとする。

あまりにも自然な笑みと、からみつくような眼差しに紗々川は彼女を拒むことができないでいた。

「どんな子だろうって思ってた。意志をしっかりと持っていて、自分に厳しい子なんだろうな、って勝手に想像していたけど」

白い手が紗々川の頬に触れる。

至極自然な動作だったので、否、紗々川自身が平素の自分ではなかったせいかもしれないが、強張ることすら忘れて、受け入れてしまう。

「思ったとおりの子だったから、嬉しかった。でも、少し心配…」
頬をつたう涙を優しくぬぐう。

柔らかな物腰、憂いを含んだ悲しげな笑み、甘い香り、女子校に居なが

ら、紗々川は初めて女性というものに触れた気がした。

鼓動が高鳴っているように気づく。

「自分に厳しいせいで、自分の価値を落としている。周囲から自分を守ることに専念しすぎて、自分の魅力を見つめ直す時がないのね」

いつのまにか、吾妻から伝わってくるぬくもりは頬に添えられた手だけでなくなっていた。

「あなたは、自分が思っている以上に綺麗だということに気づいていないわ」

紗々川を捕らえて放さなかった瞳がゆっくりと閉じられ、さらに顔が近づく。

鼻先が触れ合う。

「あなたの瞳は何故黒いの？」

「ち、ちよっとまっして」

両手をわたわたと振りながら、「一、二歩あとずさなぬ。

「わ、私にはそういう趣味はないの」

困ったように、それでもはっきりと言いつ紗々川に、吾妻はいたずらがば

れた子供のような笑みをつかべた。

「あら、それは残念ね」

夜

首筋が疼く^{こぶす} というのだろうか。

どう表現してよいのかわからない。

他人の手でも、ましてや自分の手でもない、何かに触れられているような感覚。否、触れているというのは適切でない気がする。

風に撫でられている。

これも、ふさわくない。

吾妻と別れてから、ずっと続いている不思議な感覚。

寮に戻って、シャワーを浴びても、ぬぐい去る事はできなかった。

夜着に着替えて、ベッドに腰掛ける。

ちよつと夕食の時間だったが、紗々川は立つ気がしなかった。春休み中であるから、寮にはほとんど生徒はいない。ならば自分の部屋に居るとなんら変わらない。

あちこち出歩いたせいで、身体は疲労を訴えているし、かなり非日常的な体験の連続で気力も萎えていた。

うってかわって、気分は異常に高揚しているので、なにかすべきなのは

分かるが、何をすべきなのか整理がつかない、ガチャガチャした気分を味わっていた。

心と身体がバラバラだ。

吹っ切るかのように短く唸ると、紗々川はベッドに横たわった。

夜が世界を浸食しはじめる逢魔ヶ時。

部屋にある唯一の大窓の向こうはすでに濃紺の空が広がり、傷跡のような月が、暗い部屋をほのかに照らしていた。

紗々川はぼつと眺めていた。

艶やかな薄桃色の花びらと不気味な曲線を描く枝葉。

その袂にソレはいる。四方にのびた枝葉のせいで、その姿は影でしかない。

風はなく、校庭にまかれた打ち水が夕暮れ時の今になって、むわりとした空気を漂わせる。

臆気な影は、少女の姿に見えなくもない。

「血と命は同義だって。そう思わない?」

少女はいつしか目の前に立っていて、赤みがかった髪が、潤んだ大きな瞳が、はつきりと解る。

桜の袂には別の少女が座っていた。

糸の切れた操り人形のように、だらりとしている。

紗々川には、顔が見えなくても誰なのかわかった。

「あれは死んでいるのよ」

セーラー服を真紅に染め、なおも流れ出す鮮血は地に染み出し、ゆっくりと広がって、紗々川の足下に及ぼしている。

ふと、幹にしなだれかかった少女に視線を戻す。気配がしたのだ。

やはり、少女は顔を上げようとしていた。日本人形のような清楚な顔立ち。写真と同じだ。

いや、一カ所だけ違う。喉元が一文字に裂けて、肉と骨が露になっている。そこだけが痛々しかった。

それでも少女はこちらを見つめ、ゆっくり口を開いた。

「懐かしいわ」

紗々川は暗闇に目を覚ました。

いつのまにか眠っていたらしい。

首筋に手をあてる。まだ疼いている。

ベッドから出ることもせず、じぼじぼとよする。

気のせいだと思っていた吾妻の声を思い出す。

彼女には、やはり会っている。それもずっと昔に。

時刻は深夜二時を過ぎていた。消灯時間は午後九時なのだが、かまわ

ず紗々川は部屋を出た。

夜 貳

空気が生ぬるい。

フロアリングの廊下を抜けて寮を出た紗々川はそう思った。

外と内の温度が同じだ。でも空気の流れが感じとれるほど周囲は寂
としている。

裏手にまわり、小高い丘を登る。細長い月は思いのほか明るく、丘の頂
上にある煉瓦造りの塔が紗々川の足下に蒼い影を落とす。

自分の行動に疑問がないわけではない。

これは確認だ。自分の推測が間違っていることの確認だ。

自分に言い聞かせる。

あの子の普通ではない言動も、犯行現場という空気のせいだ、異常だ
と感じただけに違いない。

それに、あの時の紗々川の状態は普通ではなかった。

桜の木に対する恐怖のせいだ。

落ち着いて考えてみると、異常なのは自分の方ではないのか。たかが木
一本に心を乱すなど、普通ではない。

そもそも、連続殺人なんて、サイコパスや精神異常者の仕業に決まっている。血をまき散らして遺体を曝さらしものにするなど、殺人を楽しんでいるとしか思えない。

そうに決まっている。彼女は関係ない。

視界が唐突に開けた。

戦前に建てられたと言われる煉瓦造りの塔は、老朽化を理由に放置され
た今でも、教会独特の澄んだ空気を周囲に拡散させている。

無関係でなければならない。さもないと。

青白い月明かりが、世界をモノクロームに塗り込める中、ゆるりゆるりと花びらを散らす一本の八重桜だけが色彩を放っていた。その華やかさは周囲と釣り合わず、禍々まがまがしさすら感じさせる。

その袂。

さもないと、自分も部外者ではなくなる。

視界が、湾曲した。

気が付けば、ベッドの上だった。

奥歯がかみあわず、全身の震えは止まる気配がない。

それでも手だけは、シーツをしっかりとつかんでいた。

不用意だったのは確かだ。物陰に隠れることくらいは考えついてもよかっただろう。

丘を登り切った紗々川は、ソレを見つけた。

しかし、明瞭におぼえていない。今しがたの出来事なのに、ソレと目が合ったにもかかわらず、覚えていない。

確かに見たはずである。

ならば、脳が思い出すことを拒絶しているのだろうか。

これではまるで。

あの時と同じではないか。

その後の記憶が意味もなく浮かんでくる。

転がるように丘を駆け下りていく紗々川。

涙で視界がぼやけている。

泣きじゃくる。だが、今の紗々川には助けを求められる人はいなかった。

恐怖に苛こごまれながら、「自分の推測が中あたっていた」と思ったのを思い出
す。

ソレは人の命を奪つことが目的ではなかった。遺体の足下に広がる血の
海は、殺人を誇示するものではなく、失われたものを隠すために行われ
た工作だったのだ。

扉を開く音がする。

隣か、否、もう少し遠い気がする。

しばらくして、扉が閉じられる音が聞こえた。鍵を閉める音がする。

足音。

そして、鍵音と共に扉が開かれる。

今まで何故気が付かなかったのだらう。何かを確認しているような足音
が、徐々に近づいてきている。

ソレが追ってきたのか。

隣の扉が閉められる音がする。

この階には紗々川以外誰もいない。

鍵音がする。

自分は部屋の鍵を締めただろうか。

早鐘のように鼓動が高まり、大量の血液が頭に流れ込んでくる。吐き気がする。

背後で扉が開かれた。

部屋の空気が流れ出し、代わりに冷気が流れ込んでくる。

人の気配がする。本当にヒトだろうか。

ぺたり

液体のようなものが頬に落ちて、唇をつたい口腔に入り込む。

鉄の味がした。

違う、血の味だ。

身体の震えを必死で押さえる。そうしなければ、理性が無くなる気がしたからだ。

目を固く閉じ、代わりに敏感になっている耳が、吐息をとらえた。

緩慢な息づかいが、ゆっくり耳元に近づいてくる。かんまん

女性のものであっただろう、唸りにも似た低い声が

「おまえか」

と言った。

想起

ぺたり

どれほど時間が過ぎたかわからない。

再び頬に、ぬるりとした液体が落ちたのをきっかけに、その気配が離れた。

生まれて初めて泡立つほどに鋭敏になった感覚が、それが遠のいていくのを明確に感じる。

扉の音が合図のように鳴り響いて、気配が完全に消えた。

ぷつりと何かが途切れた。心も身体も急速に弛緩^{しかん}して、震えが収まる。

ゆっくりと上体を起こし、軽いため息をついて首をめぐらせる。

途端に、息が詰まる。

傷跡のような月が照らす飾り気のない木製の扉の横に、それは居た。

髪の色も解らない。肌の白さも解らない。

異様な輝きを宿した瞳が紗々川を見つめていた。

「やっぱり、貴女^{あなた}だったのね」

吾妻のぞみの声でソレは言いつと、口元の片方をつりあげて、笑った。

紗々川が射すくめられて動けないのを知ってか、ソレはゆっくりと近づく。

ソレが揺れるたびに、口元を無造作に濡らした黒い液体が幾筋もの糸を引いて床に落ちる。

一瞬、顔が月明かりに照らされた。

死人のように白い顔半分を生々しい血で濡らしたソレは壊れた笑みを浮かべている。

紗々川の悲鳴が喉元で凍り付いて、脳裏に教会跡の光景が閃いた。

舞い散る桜の向こうに昏間のシヨートカットの少女が居た。肩も腕も、

脚にも緊張はなく、だらりとしていて、すでに紅く染まった身体を、からめとるように抱く吾妻の姿があった。

首筋に埋めていた顔を、ゆっくりもたげる。

「わたし、小さい時、貴女を見たの」

心臓が一度だけ、大きく脈動した。

先ほどの恐怖によるものとは明らかに違う身体の反応に紗々川は動揺した。しかし、すぐに治まる。

まるで、一度だけ押し出された血液が隅々に行き渡り、身体の萎縮も心の波紋も、なにもかも正常に戻ってしまったような、澄んだ気持ちになった。

そして、紗々川は全てを思い出した。

「あの時は良く解らなかった。ただ、恐ろしかった」

『そう、私も怖かった』

紗々川は声に出さずに呟いていた。

「でも、事故にあって、ママが死んで、ようやく解ったの」

風はなく、校庭にまかれた打ち水が夕暮れ時の今になって、むわりとした空気を漂わせる。

藤棚の向こうに居る朧げな影。

『それは少女だった』

「雪のように白い着物」

『それよりも白い肌』

「栗色の髪。そして」

琥珀色の瞳。

ソレはもう紗々川の目の前にいて、言葉が続けた。

「この世の者じゃない。…そう、あれは吸血鬼だったんだ、って」

「くすくす」

いつのまにか紗々川は床に足をおろしていた。

口元だけでほほえむと、頬を濡らす血をひとすくいだけ舐めとる。

「くすくす」

また笑って、ゆっくり顔を上げると、ソレを見つめ返した。

琥珀色の瞳で。

「おひさしぶり、っていつのかな？わたしはよくおぼえていないけど」

吾妻であったソレは一瞬崩れそうになって、「ああ」と言った。魂が抜

け落ちそうな弱々しい声ではあったけれど、明らかに歓喜の声だった。

壊れた笑みはどこかへ消えていた。

「ひん」
神々しげに琥珀色の瞳を見つめると、歓喜に震える手で、まっすぐに立

つ紗々川に触れよつとする。

刹那 紗々川であつただろつ少女の眉間に鋭い亀裂が刻まれ、瞳が紅く燃えた。

鈍い音とともに、ソレはひしゃげて見えた。その場に崩れ落ちる。

内臓を掻き混ぜられた感覚が嘔吐に変わり、自分の血を吐き出す。

歓喜も消えていた。

どうにか顔を上げると、困惑の表情で、紗々川を見上げる。

「人間つて、いつから現世うつしよの主人を気取るよつになつたのかしら」

言いながら、自分の両肩を愛おしげに抱く。

「栄子は自分のことを部外者だと思つていたよつだけど、とつくに役回りは決まつていたんだね」

ひとしきり血を吐き落したソレは苦痛に耐えながら絞り出すよつに言つた。

「のんが言ひ」

両手を床ふしについて頭かぶを上げる姿は苦戦くるせんしてゐるよつにも見えた。

「嘘よー」

しかし、琥珀色の瞳に見つめられ、すぐに声のトーンは下がった。

「見たもの、あの時。…あなたが、紗々川さんの首筋に口づけて、そのまま…消えてしまつのを」

紗々川であった少女は再び笑う。冷笑だ。

「なにも知らないのね。鬼は人でしか成れないものなのよ」

月明かりを背に、ゆっくりと、子供に話すように、言葉が続けた。

「気づいてた？あなたはもう、」

諭すように、そして蔑むように笑う。

「吸血鬼なのよ」

吾妻であった少女の中でなにかが弾けた。

涙が溢れ出して、今では自分のとも、昼間の少女のとも区別がつかない血溜りにパタパタと落ちる。

「素晴らしい業だね。そこに至れる人間はそんなに居ないんじゃないかな

貴女、このままでも充分やっていけるわ」

琥珀色の瞳に虚ろな光が宿る。

「貴女に選ばせてあげる。でも、選択肢は二つ。一つはこのまま鬼であり続けること。もう一つは……」

教会跡

始業式が終わっても、学園周辺の慌ただしさがおさまる気配はなかった。
紗々川は丘を登りきったところで振り返る。

学園が一望できた。報道、警察、それらに対応する学園関係者。全てが遠くに感じる。

彼女は今ごろ、どっぴしているだろう。

ふと思つ時がある。

刑務所の中だろうか、それとも、どこかの病院だろうか。

紗々川は乏しい想像力を働かせる。元々事件などというものに縁は無いからすぐに枯渴する。

どちらにせよ、彼女には関係のないことだ。

何度思い返しても結局、いつもの結論にいたる。

吾妻のぞみの心は、誰にも触れられない。そして、誰に干渉されることもなく、彼女は楽しかった日々を送っているだろう。永遠に。

数日前までは、いろいろな人が入れ替わり立ち代わり忙しなかった教会跡も、元の姿を取り戻していた。

しかし、一つだけ増えた物があった。桜の木の袂に添えられた花束がそれである。

四人目の犠牲者を弔うため、クラスメートや、教師や、肉親が代わりに供えているらしい。

紗々川も同じ事を考えたが、止めることにした。

花束の前にしゃがみこむ。その向こうには、やはり血の跡が広がっている。桜の幹にもくつきりと残っている。

でも、構わずに桜は咲き乱れていた。

今となっては何も感じなくなったが、それでも綺麗だとは思えない。

「私、あの子のこと、好きだった」

桜を見上げながら紗々川はぼつりと呟いた。

「うつつ世は、ままならないものよ」

瞳を琥珀色に変えて、紗々川は応えた。

了

あとがき

この作品を Serra, Lantan 両氏に捧げる。

(笑)

今年春に取り交わされた盟約、冬にして結実です。いやはや、まあ相変わらずの遅筆で。

反省だけなら猿でもできる。

ぬ！ 久々に出たな、もう一人のフレイ・にしても、そのフレイズは何だ？

それは君たちが勝手に作った流行じゃないか。僕はそいつのが苦手だね。

ま、いいや。とにかく「お題その2」完了です。

今回は思いつくのがかなりあるんじゃないかな

そそ、んなわけだから、通常のがあとがきと「小説」つつつ物を書く上での試み、みたいなのに分けようと思っただが。

後の方が弱気だね。気持ち半分かなよ。

まあね。「小説の書き方」サイトって結構あって、内容は至極充実してるし、それらとタメ張るうだとか、そんな野心は一切ないワケで、そのあたりがね。まあ、「参考」というコトで。

「小説」を書く上での試み、っても一冊の本を参考にしただけなんだけども、その名もズバリ

「小説家への道」(株)マガジンハウス発行 税別1500円

この本は、私が日頃ROMらさせてもらってる、某小説サイトでも取り上げられてて、早速ご購入。

おおざっぱな内容は、小説新人賞を取る(新人賞つつつても世の中よりさんあるのに驚いた)ことを主眼に、著名作家の「私はこいつで賞をとった」とか、具体的な添削がされていたり、実際に賞の選考者が投稿作品を読む前に読む人「下読み」つつつ人から見たダメな書き方なんか載っけていて、そこそこ充実している。

賞を目指す人も関係ない人も文章を書く人であれば一度目を通しておいて

損はないな。

で、その中で目に付いたのが、「技術面で文章の質を上げる」という項。まとめるとして下記のような具命。

- ・「そして」「しかし」は取れ
- ・「～のような」「～という」は極力減らせ
- ・主語の繰り返しは避けよ
- ・「～が、～が」「～し、～し」と繋げてはいけない
- ・陳腐な慣用表現は絶対使わない
- ・文末の「…」はダメ
- ・思わせぶりの曖昧さは逆効果
- ・語彙は豊かに、単語の意味は正しく
- ・主語と述語はねじれていないか
- ・最後に声に出して読んでみる

「いわは…、僕はそんなことも言わねえわいじゃないうたが、そんななヤバくないかな？」

まあ、いいじゃん。

そっかい？

いわゆる、「表現」で質を上げるのではなくて「書き方」で質を上げようというワケだな。

項目の内容は、ごく基本的な事も含まれているけど、これがまた、長々と文章を書いてると、結構守れないものなんだな。今作はその辺を気にしながら書いたけども、つまぐいっただろっか。

「いわは、前提だけよ、読者のみぞ知るってマジかな」

その辺のしがらみもあって、本作のUPは全編できあがってからだったワケで、逆に言つと、長編とかになると、部分的にUPするしかないワケで、上記のような文章チェックにだけでなく、書いてるうちに物語の方向修正なんてのもあって、UPされたあとの文章手直しも必要になってくる。

タイミングが重要なわけだ。

「～という問題の対処ってどうやってるんだろっかなあ。」

最後の音読とUPのは恥ずかかったな。

うんむ。でもチェックには結構役立った。それとは別に、音読と黙読は明らかに文章を捕らえるニュアンスが違つたつのもわかったな。ともあれ、そっという面も含めて、感想欲しいなあ。

今回も元ネタがあるわ

う、わかる人には解るので、言明は避けたい。それにホラ、ネタ云々の前に文章自体をなんとかしたい、と思ってる有様なので、その辺は穩便に。しかし、ネタつつつたら、最近CMが気になってる。どのCMかってワケではなくて、全般的に。番組より感心させられる。すごいよなあ。あんなアイデアが思い浮かぶおミソが欲しい。

本作には原型があつて、超短編として置いておいたもの。内容は子供の紗々川とニセ(?) 吸血鬼との出会いの場面で、時代設定は昭和20年代、場所は母親との買い物帰り。

この時、物語性は一切なくて、その時代の風景とかが表現できればなあ。なんて思ってた。京極夏彦にもハマってたし。

今でも心酔してるじゃないか。

京極はイイ!

何がイイかつつと、コノ人の作品を読めば、そこらのページ数が薄い小説なんか楽に読めるよつになる。

あの分厚くて前後編で出たわたしの時は 良いや意味あきたなあ

で、その原型にいろいろ尾ひれをつけたのが、連続殺人モノ。人間の記憶のモロさみたいなのがテーマだった。時代設定はやっぱり昭和20年代。ヤミ市だとか、当時盛んだった婦人運動の資料とか集めたけど、物語を組み立てていくうちに、戦後という設定の必要性が感じられなくなって、本作に至る。

嫌な記憶つてば、本人が驚くほど歪曲されて覚えてるものなのな。その辺伝わっただろうか?

あと、後半で「怖」「って微塵でも思ってもらえたら幸いだなあ。

今回は「お題もの」ってことばを解いてみるか。

うー、かなり悩んだんだなあ。本作が「お題」に適しているか。

どちらかというところ、ダークな内容だし、「こいつのじゃないんです」「と思われたのでしたら、ごめんなさい。

ともあれ、私のような駄文書きに、モノを書く機会を与えてくださったことと深く御礼申し上げます。

